

補遺 國語研究室本節用集解題

此の稿が成つてから、東京帝國大學文科大學國語研究室の所藏に歸した節用集の古寫本がある。此の本は、澁色の表紙を附けた半紙形の綴本であつて、丈七寸八分餘、幅五寸七分、表紙には題目なく、唯其の裏に「節用集」と記したばかりである。本文は、四邊に欄界を引いた紙に、一面八行に書し、すべて百七丁、之に廿六丁と半丁との附録を加へて全部百三十三丁半、題目は卷頭にも無い。附録は

日本諸國名(諸國の州名、郡數、田數、廣袤、物産、郡名等)

野馬臺起

野馬臺詩序及び註

名字抄(則に始まり彦に終る。略、同訓字の數によつて排列したものの)

大内十二門

仁義禮智信

武士人倫可覺悟(最後に「高氏將軍の送之夢想國師」とあつて、永祿二年本及び經亮本にある「夢想國師尊氏將軍教訓十三ヶ條」)

と同一である)

山字形の詩(三種)

崑崙山、黄河の事など

行基菩薩日本國之圖

最後の表紙の裏面に十千の名があるが、其の他、奥書などは無い。書寫の年代は明でないけれども、紙質字體などから見れば、元和寛永頃のものかと思はれる。今、之を國語研究室本と名づける。

此の書は全部楷書片假名で、假名には、間々古體のものもある。部數は、總て四十四であつて、ゐ「た」ゑ「る」の三部には本文なく、部名は萬葉假名で標して、之に一行を與へ、爲部には「在前、於部には「爲見前」惠部には「爲見于前」と註してある。大概、門毎に行を新にし、門名は略して唯一字だけを欄上に標出してあるが、又、前の門の後に、直に後の門を續け書いた所があつて、これには門名を朱書してある。門は

乾	時	草	倫	官	名	支	病	氣	財	衣	色	食
言	數											

の十五であるが、時を候(ク部)、草を生(ス部)、倫を人(チモスの三部)、名を

人(イルワカコエの六部)、氣を畜(カ部)、財を器(タツムスの四部)又は寶(チヲワカヨレソネナクヤコシの十三部)、色を光(ミ部)とした所がある。イ部の最初の語は「印度」である。

此の書は、内題外題共に無く、唯、表紙裏に節用集とあるばかりであつて、これは後の加筆かとの疑もないではないが、其の體裁及び内容から見れば、疑もなく、節用集印度本の一本である。さうして、其の門數十五であつて、衣(衣服)及び色(光彩)の二門を含み、殊に、ミ部に光彩門がある事など、弘治二年本類の特徴を具へて居る。

斯の如く、此の書は、弘治二年本類に屬するものであるが、各部に於ける門及び語の數は、弘治二年本や永祿十一年本よりも少くして、大概圖書寮零本に等しく、病名門がシセ兩部にあり、伊吹木がイ部とユ部との草木門にあつてユ部には「見伊」と註し、瀟湘八景がハ部數量門とセ部乾坤門とにあつてセ部には「見于波」と註したなども、亦之と特徴を同じうする。イ部言語門の前に數量門があるのは、和漢通用集と同様であつて、これが、弘治二年本類原本の形であるべ

き事既に述べた如くである(第三章第二節四参照。門の順序も、亦、略圖書寮零本に一致するが、語の順序だけは、何れの本とも一致しない所が多い。唯、和漢通用集には幾分か近いやうである。註も稍少く、且、疎略であつて、大體圖書寮零本に似て居るが、稀には委しいものもあつて、淨藏貴所の條の如きは、永祿十一年本と同じく、山城易人云々の長い註がある(弘治二年本類原本に於ても亦さうであつた事は、第三章第二節四に説いた如くである)。

國語研究室
本の特點

此の本が、同類の他本に對して有する特異な點は、門の名であつて、天地門に「乾」乾坤の略を用ゐ、畜類門に「氣」氣形の略を用ゐてある。又時節門には「時」を用ゐた所と「候」を用ゐた所とがあるから、これも、多分「時候」を略したものであらう。此等の諸門に、かやうな名を用ゐたのは、弘治二年本類のみならず、印度本及び伊勢本にも例なく、唯、乾本(易林本類)にのみ見る所である(但、時節を時候としたのみは、他にも類がある)。

又、此の本の附録に京町盡が無いのは、他のあらゆる古本節用集の

諸本と一致しない所であつて、若し、これが、最初から無かつたものとすれば、前に、京町盡が節用集原本に存したと推測したのは、第三章第六節訂正しなければならぬのであるが、これには猶疑が無いでもない。此の本には、テ部言語門「手習」の註に「日本人以書爲手之[○]見[○]于[○]后[○]」とあつて、しかも、其の後に、之に關する記事は全く見えないのであるが、圖書寮零本を見ると、「手習」の條に、之と全く同じ註があつて、同時に、附録に「日本人以書爲手」の一條がある。此に由つて觀れば、此の本にも、もと、このやうな附録があつたのであつて、今無いのは省き去つたものと思はれる。又、此の本のフ部の最後に筆の異名があり、ス部の最後に硯と墨との異名があるのは、弘治二年本其の他の如く附録にあつたのを、後に本文中に收めたのであらう。斯の如く、此の本の附録は、原の形を改めたもので、もとあつたのを省略した痕跡の明なものもあるのであるから、京町盡が無いのも、必しも、もとより無いのではなく、此の本に於て除き去つたのではあるまいかと疑はれる。千千十二支も附録中に見えないけれども、こ

國語研究室
本と易林本
類

乾本と弘治
二年本類と
の關係

國語研究室
本の系統

これは、和漢通用集と同じく、シ部時候門「支干」の條にあるのである。次に、此の本の附録にある日本諸國名は、印度本に存するものよりも委しく、乾本、即、易林本類に存するものに最近いけれども、猶之よりも田數だけ多く、易林本類のは、其の中から田數だけを除いたものと、殆ど全く同一である（新撰類聚往來にあるものとは、殆ど一致するが、州名などは、其よりも一層易林本類のに近い。第三章第一節三の（二）参照。かやうに、此の本は、門名に於ても、附録に於ても、易林本と其の特徴を同じうする所があるのであつて、之を、かの易林本と和漢通用集との類似（第三章第五節二参照）と併せ考へて見れば、乾本と弘治二年本類との關係の遠くない事が益明になるのである。要するに、此の本は、弘治二年本類に屬する一本であつて、同類の諸本中、最圖書寮零本に近いが、又、和漢通用集に似た點もあつて、恐らく此の兩本と相竝んで弘治二年本類原本から出たものであらう。さうして、又一方に於て、易林本に近い所があるのは、弘治二年本類の中で、易林本の根源となつた所の本と密接な關係があるからで

あらう。さればこの本は、乾本の起源を研究するには、和漢通用集と共に缺くべからざる資料である。

